

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

イタリア食文化紀行

～ポローニャ編～

岡本 勇志

シエナの朝はウンブリアと似た穏やかさだった。都会の喧騒に満ちた朝も悪くないが、やはり心安らぐのはこういう朝。

今日はシエナを出発し、ポローニャへと向かう。少し急ぎ気味で支度をし、シエナの中央駅へ。近くのパールでお決まりのカプチーノとコルネットの朝食をとり、バスを待つ。

朝の日差しがシエナを照らし、クリーム色の建物がそれを反射し、まさに絶景。素晴らしい広場、わたしを虜にしたドウオーモ、最高のキアニーナ牛とキャンティ・ワイン、そしてホテルやピッツェリアで出逢った人達への感謝の気持ちを胸に、また必ず戻ってきますと心で誓い、ポローニャへと揺られて行った。

ポローニャの街に着くと必ず目につくのが2つの斜塔である。アシネッリとガリセンダの2つの塔がポローニャのシンボルである。かつて権力者や富のあるものがより高い塔をたてることで威を誇っていたと言われる。まるでポローニャの町を見守っているかのようなこの二つの斜塔は見事なものだった。とはいえ、私にとっては塔よりなにより、やはりレストラン！

到着したのはお昼前。私はさっそくレストランを探した。ポローニャといえはなんといっても、Tortellini in brodo (鳥などのブロードに浸かったショートパスタ)、Tagliatelle al ragù (きしめんのよう太いパスタのいわゆるミートソース)、そしてCotoletta alla bolognese (ポローニャ風カツレツ)。これらの代表料理を目指した。

ネットでよさそうなレストランを見つけて、ナビを片手に到着。運良く空きがあり、テーブルにつくことができた。注文はもちろん、Tortellini とCotoletta、そしてウンブリアでも定番のサンジョベーゼの赤ワインを半分ボトルで頼んだ。

実は、ポローニャにくるまで私はCotolettaに良いイメージがなかった。それはミラノで食べたCotolettaが美味しくなかったからである。

大きくわけると、Cotolettaにはミラノ風とポローニャ風がある。初めて食べたのはミラノ風で、牛肉を薄くたたいて小麦粉、卵、パン粉をつけて焼き揚げたものにレモンを絞って食べるというもの。これが、行った店が悪かったのか、不味かったのだ。肉が硬く食べにくい上に、レモンがあまり合う気がしなかった。それゆえポローニャ風もあまり期待はしていなかったのだが、その土地のものを食べるというスタンスを崩すわけにはいかないとCotolettaを頼んだ。

さて、いよいよテーブルに運ばれてきたCotolettaを見た瞬間、『おっ！』と思った。牛肉を揚げ焼きしているのはミラノと同じだが、さらに生ハム、パルメザンチーズ、トマトソースまでのせて焼いてある。なんともボリュームで贅沢。一口食べるや、一瞬にしてミラノ風は忘れ去った。

『うまいっ！』

自然とワインに手が伸びる。ワインを一口。

『うまいっ！うまい！！』

最高に美味しいCotolettaだった。

あとから聞けば、ポローニャは金融で栄えた町。

食にも古くから贅沢な街だったとか。だから、肉に生ハム、パルメザンチーズ、トマトソースとうまいものにうまいものを重ねる料理ができあがったのかもしれない。贅沢な Cotoletta を豪快に食べきった。そのときふと、『あれ？お腹いっぱいや…』。そう、食べる前はお腹が空いていたのだが、肉に生ハムにチーズそれにイタリアンサイズの大きな Cotoletta で、お腹いっぱいになってしまったのである。



【ボリューミーな Cotoletta】

そのとき、Tortellini が運ばれてきた。それを見た瞬間、『あかん…、多い…』。一目で食べることでできない量だと悟った…。でも、食べないわけにはいかない。香りも味もしっかりしたブロードに、つるんとした手打ちのパスタ生地、そこへ少しだけかけてあるパルメザンチーズの香りがマッチして、最高に美味しかった。

『うまい！でもお腹いっぱい！でもうまい！』

なんとかやっとのことで食べきった。食べ終わったときにはお腹ははちきれんばかりだったが、美味しいものを食べた喜びのほうが大きかった。カメリエーレが『よく食べたね！』と褒めてくれた。

少々恥ずかしながら美味しかったと伝え、夜に

向けて腹を空かせるためにお昼のボローニャの街へと歩き出した。いつものようにドウオーモに向かった。

ボローニャのドウオーモは思っていたほど派手ではなく、落ち着いて見えた。シエナのドウオーモにあまりに感動したせいか、それほど心に響くものはなかったが、とても綺麗だった。

さて、まだ昼過ぎでどうしようかと思っただが、とりあえず予約していたホテルに向かい、寝所を確認しホテルで少し休憩をした。

夕方、再びボローニャの街へくりだす。あてはなく、ただふらふらと歩く。ボローニャの日常をみながら。

小さな広場についた時、小さな教会が目についた。何気なく入ってみると、普通の教会だった。

ここで不思議な体験をする。

教会の中を一通り拝観して出ようとする、出入り口にイエス・キリストが十字架にかけられている像がある。目の隅に入ったものの、そのまま出ようすると、なぜか後ろ髪をひかれる。

『ん？なんか変な感じやな…。なんや、なんか出にくい…。そうか、イエス様に挨拶せな…』

今でも理由はわからない。ふとそんな気になり、開けかけたドアを閉め、再び教会の中へ戻り、イエスの像の前に立つ。心が落ち着いた感じがした。目をつむって手を合わせることも十字を切ることもせず、ただ少しうつむきかげんに目をつむり、心の中でイエス様に話しかけた。

『私は日本から来た者です。わたしは日本の神様を信じていますが、ここはあなたの場所。きっと見守ってくださっているのだと思います。深く感謝し、あなたに会えたことを心から嬉しく思います。本当にありがとうございます』

考えることもなく、心の中ですらすらと言葉がでてきた。一通り言い終えると、目を開けすっきりした気持ちになりイエスの像に一礼をして気持ちよく教会を後にできた。今でもわからないのである。なぜあの教会だったのか。なぜあのような気持ちになったのか。

私はけっして信心深いわけではない。日本にいるから仏教の文化で育ち、個人的に神様は自然の中におられるものと思い生きてきた。だからキリスト教もイスラム教も、興味から歴史的なこと

は知っていても、信仰はしていない。でも、このようなことが起こった。自分なりに宗教や文化、人々を考える機会となった。

さて、不思議な体験をした教会を出て、再びぶらつく。まだ夕飯までには少し時間があつた。

街を歩くといつもの大好きな光景が広がる。おそらくいつものように、お母さんがパスタ屋さんで今日はこのソースだからパスタはこれにしようとか言いながら買い物をしている。

いつものバルで新聞を広げる老人。これぞイタリアだなあと。

フラフラしていると、ドゥオーモの前の広場にもどってきた。ふと横を見るとワインがずらりと並ぶお店を発見。アペリティーヴォでもするかと、ふらっと入って白ワインと生ハムを注文。一息入れた。旅はこれがいいのである。行きたいところに行き、休みたい時に休み、眺めたいものを眺めることができる。

考えてみると、仕事したり勉強したり、時間に追われる普段の生活では考えられない、幸せな時間の使い方である。それをワインと生ハムと共に噛みしめた。

これからのプランやこれまでの旅を少し思い返したりしながら店を後にし、夜のレストランへ向かった。

ボローニャの町も日が暮れはじめ、広場では子供がペンライトのようなもので遊んでいる。その光の軌跡が綺麗だった。イタリアでは大きな都市になればなるほど広場で移民などが子供向けにおもちゃを売っている。それは暗くなると光るペンライトのようなもので、子供たちはこぞってそれで遊んでいる。それが自然に広場とマッチして、広場がライトアップされているようになるのである。

広場を横目に足をレストランに進め、路地を抜けて到着。事前にネットで調べておいたレストランだ。が、入ってみると、どうやら満席のようだった。予約はしていないと伝えると…今は満席で…と断られた。それなら仕方ないと帰ろうとすると、なんと、一人なら、次の予約のお客様が来るまでの1時間ほどでよければ席が空いているというのだ！なんともついている！とすぐに案内してもらい運良く店に入ることができた。

『こんなこと…シエナでも起こったな』と思い出され、感謝しつつオーダーをした。メニューを見ると牛肉のタルタルとある。イタリアでタルタルというと、生の魚か肉を細かく切り、野菜と合わせた前菜を意味する。

『おっ！生肉を食べられる！』とすかさず注文し、パスタは Tagliatelle al ragù (ミートソースのきしめん風の pasta) を注文。両方とも最高に美味しかった！時間が短く慌ただしかったが、とにかくボローニャで食べたいものを食べることができた。

1 時間経ち店をでて、ペンライトが綺麗な広場に戻り、夜のボローニャを眺めた。

明日はいよいよヴェローナ。旅も半分を越えた…。ヴェローナの次は念願のヴェネツィア。

どんな出会い…料理が待っているのだろうか！期待と一抹の寂しさを胸に、ホテルにもどった。

(当館元留学生)

～レストランご紹介～

京都下鴨 ダイニングぼてちん

今月のコレンテにご寄稿頂いた岡本さんがおつとめの、京都下鴨にある洋食店です。引き続き今月も特典ご提供頂きましたので、ぜひご利用下さい。名物のタンシチューがおすすめです。

住所：京都市左京区下鴨西本町 21-1-101

アクセス：京都市バス・京都バス「府立大学前」

下車 目の前

Tel: 075-781-0028

HP: <https://www.botechin.com>

特典：ぼてちんのチラシか今月号のコレンテを提示していただくとアイスクリーム1つサービス
(特典期間：2020年9月末まで)

ジョルダナーノとアガンベン

～コロナと向き合う作家と思想家～

二宮 大輔

今年 4 月に刊行されたパオロ・ジョルダナーノの『コロナの時代の僕ら』が大変な評判になっている。イタリア語からの邦訳書では、ここ十年でいちばんのヒット作と言えるのではないだろうか。

ジョルダナーノはトリノ大学で物理学を専攻し、修士課程に在籍していた 2008 年、25 歳のときに、初の長編小説『素数たちの孤独』を書きあげ、イタリアで最も重要な文学賞ストレーガ賞を受賞した。華々しいデビューを飾った現代イタリア文学の旗手が、このたび 27 章からなるコロナ考を発表した。そもそのきっかけになったのは、大手紙コリエーレ・デッラ・セーラに彼が寄稿した「コロナウイルス、混乱のなかで私たちが判断するのを助けてくれる感染症の数学」という記事だった。2月25日、つまり北イタリアの一部地域が封鎖された数日後に掲載されたこの記事は、大きな反響を巻き起こした。それなら、ということで、記事の内容を改めて書き直し、一冊にまとめたのが本書だ。

「この感染症がこちらに対して、僕ら人類の何を明らかにしつつあるのか、それを絶対見逃したくない」ゆえに、この時期に執筆する決意をしたという宣言から始まり、ビリヤードの球に例えて、感染スピードの指数であるアールノートや、感染の危険性をわかりやすく解説し、さらには日々の雑感や経験から、示唆に富んださまざまな意見を導き出している。

日本で出版されたのが緊急事態宣言のただ中だったというタイミングも関係するのだろうが、実に多くのメディアがジョルダナーノの文章を金言としてもてはやした。日本での彼の快進撃を、正直なところ、私は冷めた目で傍観していた。理系文人ならではの考察もあるが、緊急発売に合わせて書き急いだせいか、深みがなく、問題が掘り下げられていない。日本では、非英語圏の作家という

物珍しさが手伝って、過大評価されているというのが私の第一印象だった。

事実、それは人気作家の宿命でもあるのだが、自国イタリアでの評判は芳しくない。「分り切ったことを書いているだけ」「新聞記事ならまだしも、本にする内容ではない」。そして日本で私の気持ちに同調してくれたのは、よく行く人文思想系の古書店の主人だった。「ジョルダナーノって何者なの？ 読んだお客さんたちみんな拍子抜けしてるよ」。そう、そのタイトルから内容に期待して本書を購入した古書店通いの読書家たちにしてみれば、本書の内容は拍子抜けするほど深みが足りないのだ。



【『コロナ時代の僕ら』表紙】

出典元: <https://www.hayakawa-online.co.jp/shopdetail/00000000145/>

ところで、そんな読書家たちが好むはずの深みたっぷりの思想家のなかにも、コロナに関する文章でやらかしてしまった人物がいた。イタリアの現代思想の大家ジョルジョ・アガンベンだ。奇しくもジョルダナーノと一日違いの 2 月 26 日にイル・マニフェスト紙で、「感染症の発明」なる文章を発表し、

物議をかもしただ。できる限り原文を反映させて下記に要約してみよう。

コロナウイルスによる緊急事態の対策は、まったくもって根拠がない。これに関しては CNR (Consiglio Nazionale delle Ricerche イタリア 学術会議)の発表から、考えてみる必要がある。CNR によると「この感染症の 80~90%のケースで、軽度の症状(インフルエンザのようなもの)を引き起こす。10~15%においては肺炎に発展するが、大多数の場合、その進行は比較的遅い。算出すると 4%の患者のみが、集中治療室への入院を必要とする」

もしこれが事実なら、どうしてメディアと行政はパニックを演出し、厳しい移動制限を敷き、各々の地域で生活と労働の機能を停止させて、例外状態(※1)を誘発するのか？

この過剰な対応を紐解くと、二つの要因に集約される。まず政府が平常のパラダイムとして、例外状態を用いる傾向が強まっているということ。「国民の衛生と安全を理由に」イタリア政府によってすぐさま承認された緊急政令は、「感染経路がわからない陽性者が一人でもいる地域、もしくはウイルス感染がすでに及んでいる地域から移動してきた人間に遡ることができないケースが存在する地域において」軍事化に帰結する。このように曖昧な表現では、あっという間に例外状態が全地域に広まってしまう。政令が自由を制限していることにも注意されたい。感染が及んだ地域感染への出入りの禁止や、集会、イベントの中止、学校教育の中止、検疫期間の有効化などが定められている。

CNR によれば毎年流行するインフルエンザと大差のない感染症に対して、この政令はやり過ぎに思える。例外状態の対策の理由として、テロ(※2)が頭打ちになってしまったところで、この感染症の発明が、度を超えて対策を拡大させるために恰好の言い訳を提供してくれたのだろう。

もう一つの要因は、ここ数年で明らかに個人々の意識のなかに広まった恐怖状態である。全体的パニック状態の必要性と言い換えることもできる。そのために、感染症は今一度、恰好

の言い訳となった。こうして、背徳的で邪な世界で、各政府が課す自由の制限が、安全を欲するという名目で受け入れられ、その欲を満たすために政府の介入が始まっている。

※1 stato di eccezione、国家の非常事態を意味する彼の思想の核となる概念

※2 アガンベンは、特に 2001 年の同時多発テロの後にアメリカが例外状態を利用して強権化したことを非難している。

なんとアガンベンは 2 月 26 日の時点で、CNR の発表を根拠に、コロナが「インフルエンザとさして大差のない感染症」と言い切ってしまった。ご存知の通り、その後イタリアは、インフルエンザとは大いに異なる未曾有の事態に発展したので、コロナを軽視したアガンベンは盛大に叩かれた。それでも彼はブログを書き続け、加筆修正をして 7 月に一冊の本“A che punto siamo?”(私たちはどの段階にいる?)として刊行した。

「感染症は発明ではない」「政府を批判しているのに政府関連組織 CNR の情報に依拠しているのは矛盾している」。ほとんど老害のような言われようで批判されたアガンベンだが、擁護の声も少なくなかった。ポイントは彼が先述の記事で用いている「例外状態」という用語だ。1995 年から続く連作『ホモ・サケル』で次のように説明している。古代ローマ法で言うところの「ホモ・サケル」とは「法の外部へと排除された人」のことで、いわば生命の尊厳をなく奪われた人々たちだ。それは例外状態にある生と言い換えることができる。このホモ・サケルおよび例外状態は、なにも古代ローマに限った話ではなく、アウシュヴィッツやアメリカの帝国主義など、現代にいたるまで様々な場所で形成されてきた。

こう考えてみると、彼が、コロナ下の生活を例外状態にして人々から自由を奪う政府のやり方に警鐘を鳴らすのは、当然のことだと思えてくる。彼は自らの思想を、現在の状況に当てはめたにすぎない。予測を外したという事実注目が集まりがちだが、各国が次々に例外状態になっていくなかで、自らの思想をもってコロナの問題にいち早く取り組んだまっとうな思想家なのだ。

アガンベンのような存在を認識した上で、もう一度自問してみる。さて、パオロ・ジョルダノとは何者か。古書店の主人から問われた私は、ジョルダノが日本でヒットしている違和感を共有できて嬉しい反面、擁護したい気持ちもよぎった。ジョルダノを批判するのは容易だが、ひょっとすると彼もまた、コロナ問題に対してあえて口火を切ったもう一人のアガンベンなのではないか。そこで『コロナの時代の僕ら』を改めて読み直したところ、私が最初ジョルダノに抱いていた印象は音を立てて崩れ去った。

時系列をしっかりと追って見ていきたい。ロンバルディア州のコードーニョでイタリア人初の感染者が発見されたのが2月20日。イタリア人で初めての感染者が、しかも聞いたこともない小村から出たということで、まさにイタリア全土が震撼した。22日コードーニョは封鎖され、23日には北イタリアで学校、美術館、劇場、映画館に閉鎖命令が下る。ジョルダノとアガンベンが記事を書いたのがこの時期だ。『コロナの時代の僕ら』の27章はその直後、2月29日から3月4日の間に書かれている。その後も感染者の増加に歯止めはきかず3月7日にロンバルディア州を中心にレッドゾーンが指定され、4月3日まで各自治体の行き来が禁止される。さらに3月10日レッドゾーンが全国に拡大。11日には、生活必需品に関連する店と薬局以外のすべての店を閉鎖することが追加で決められ、ロックダウンが始まった。4月3日に解除されるはずだったロックダウンはその後、5月4日まで延長されることとなる。

ジョルダノは、ロックダウン発令後の3月20日にもう一度コリエーレ・デッラ・セーラ紙に寄稿している。「コロナウイルスが過ぎたあとも、僕が忘れたいこと」というタイトルの記事で、これが『コロナの時代の僕ら』のあとがきとして付け足されているのだ。訳者によると「宝石のような」この文章のおかげで、本書はまったく違った意味の作品に昇華されている。

なぜなら他の27章とは違い、このあとがきは感染者数も死者数も絶望的なほどに増加の一途をたどっている真っ最中に書かれているからだ。ゆえにその文体からは、他の27章とは異なる切迫感が伝わってくる。「僕は忘れたい」を繰り返し

ながら、まさに忘れたいことを羅列していく箇所は、感情が爆発していて最高だ。

僕は忘れたい。結局ぎりぎりになっても僕が飛行機のチケットを一枚、キャンセルしなかったことを。どう考えてもその便には乗れないと明らかになっても、とにかく出発したい、その思いだけが理由であきらめられなかった、この自己中心的で愚鈍な自分を。

思えば2008年のデビュー当初、ジョルダノは出版界によって生み出されたスターだと揶揄された。それでも二作目『兵士たちの肉体』では、自ら現地に赴いたルポをもとに、アフガニスタンに派遣されたイタリア人兵士という、誰も挑戦していなかったテーマで小説を書き、勝負に出た。今回の、自らを愚鈍と貶める彼の発言からは、今もなお、ジョルダノが作家としてもがき、挑戦している様子がうかがえる。27章とあとがきの間で起こった感情の変化は、日々状況が急変するコロナという主題に取り組む作家としての真剣さが顕れているのではないか。

8月15日、ジョルダノはイタリアでふたたび増え始めた感染者数を危惧して、新たな記事をコリエーレ・デッラ・セーラに寄稿している。彼がアガンベンと同じく、コロナにいち早く反応し、そしてこれからもこの問題に付き合っていくだろうまっとうな作家であることを、我々は認めなければならぬ。日本では金言としてもてはやすのではなく、深みがないながら必死に問題に向き合っている若手作家という読まれ方がされなければならない。

(翻訳家、元当館語学受講生)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>